特54
102

殖産興業関係書類

北米利加州

巻

古論武子

北亞米利加の事

千四百年代の末利足の時伊太里の古論武士といふ人ゆを羊の毛績ぐ貪しき

北亞米利加洲

「亞米利加」は西の新世界の縣の狀

横たゑ北は馬良尾の岬より南の瀬

貴重書

家の子かをしゝが航海の術と心得其志を所九人ふゝらばし獨を自かゝ考ふる

「麻陳蘭」長さ四百余里北世界の狀圓きも

「乃二大海北理」

東に方は印度か

の土地ゝもバ西

の方ふも必ず地方

ゝる面しとて說と

立西班牙の王か說

地球の至二千餘里

き王妃の助を以て

船三艘を仕立西一ゝ

方をさして乘出せ

しふ果しく陸地と

幾明しうを頃ハ千

四百九十二年即ち

我明應元年かをも

「歐羅巴諸國」

の人頻か往来して

地面を見出し

東の方を「河多羅」海」より廻ハ左乎

海」北西の方日本

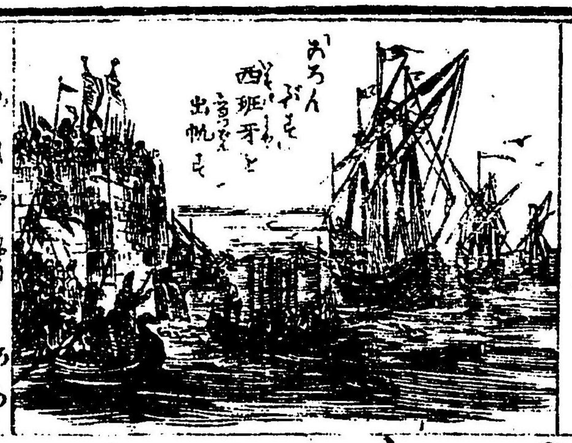
「北亞米利加」渡

海して「厚保爲仁屋」

見出をゝ隨ひ本國より人を移して新地を開殖し得る所の利潤も多し土地の模様ゝ由り地理の學者ハ亞を南北二大洲ゝ分ち又亞細亞阿非利加歐羅巴と旧世界といひ亞米利加と新世界

北海を東西二千餘里世界第二の大洋なり北亞米利加の西の隅

界ともいふ



○魯西亞領の亞米利加ハ唯土地の廣大なるのみ

民俗ハ未だ開化せず人の樣ハ漁獵のみ

きのみおて産物も
少なし慶應三卯年
合衆國の政府七百
二十五萬「どるら」る
の金を以て此土地
を残らず買取り當
時ハ合衆國の領分
ときまり都て亜米
利加の北方ふ住居
する土人ハ「えすき

「具理院蘭土」「伊須
蘭土」其本國ハ「嗹」
北極ちか紀寒帯
其凛烈と稍西秋の
雪や氷の[illegible]煙

もう」といふ人種は
て身の長五尺ふ足
らず通用の文字も
なく人物甚だ愚
なり寒國のことな
れバ穴藏ふ住居し
て衣食共ふきたな
し或ハ氷を積立て
穴藏とすることも
あり

吹出す噴火山実ふ
珍し紀景色なり
「英吉利領の亜米利
加」ハ北極海の島辺まで
南ハ鄰る「合衆國」

「北亜米利加」は二つに
して其一分は土地
寒氷と北方不毛の
義理なき人民僅十
八萬七千家

「おもしろい」の外ふ
し無知文盲の野
又「いんぢやん」といふ人種は即ち亞
民は南米は金田
米利加の土人種と
ハ云のことなり昔
「ろんぶを」が亞米
の地氣候第一利
利加と見出せし前
此國に住へる
者にて開闢以来の
民多く野蛮
亞米利加人なれど
もて人
文明の潮水

も其性質殺伐ふ
て文字を知らを愛
さだめし家もなく
山阪を排徊し弓矢
を以て獸を殺し肉
を喰ひ皮を着て生
涯を渡る者なり獸
羅巴人の亜米利加
へ移りしより此人
種を追拂ひ都會の

海河は先づ
此畔の喜望峰
小築建て植民は
金城湯池の如し
世界の富源亜米利加

地へ出るを許さず
追々其人の數も減
少するよし

の治都良留多留
此人多留河の流
潮門出里留多留河
中の海を羅巴
文易場西へ上る

○金田の地ハ近来益々繁昌して諸藩か學問所も多く往来の便利ハ蒸氣車並に湖水か浮べる蒸氣船ハて商賣の道も甚だ盛なる西洋人の説か此地も行々ハ英吉利の手を離れて獨立も

小田河

小田河府を英吉利

小田河府北ハ北

極西方ハ太平海の

海の赤ハ河

るか又ハ合衆國へ歸して一の政府とかるべしいか

喜久壹別場の圖

多羅海新見の國

其一千年

極西北亜米

利加

英吉利

威勢

振ふ根本

金田の都
小田羽府政事堂の景

八金田地方ハ所領
たり
巻矢の水と土地廣
く平坦の源と民多
し
○前かもいへる如く亜米利加洲と見出せし後ハ歐羅巴

の諸國に家を移
し三百年ごろの
間ハ人別も追々増
し今の合衆國の東
海岸の地ハ英吉利
の領かかて人の産
業も繁昌するハ付
本國の政府を蓮
上と取とげんとせ
しハ領分の町人百

靈の矢富強の
賢不肖を乃越ハ異
方の人耳目鼻口
四肢の官是非曲直
を分別し善を法

姓どもの言かゝ億兆の人民天地の間に生を貧富強弱の別あるべからん男ハ男一人かを女ハ女一人なり他人の妨と為さゞるをハ亦他人を妨げらるゝの理なし今此地ハ原て銘々の家業と

本性を豐まむ天然

能く一種無類万物

の靈なる天の性

を全ふ易ハ一大義

を基とし國を報ゆ

丹心誠を以て一国

當て銘々共の申合せハ國中の取締を行届き本國の世話を受けゞとも自から一國を治るゞ

の覺悟ある要へ政府より色々の命令を下し謂ゆる運上を取立んとハ

ゝざる世話を為し

役人の執政

我自由天の理

て下々の家業と坊ぐるのをからを人の物を奪取てしの用を達せんとする不埒の挙動かをたしひ國王政府の命ふともあをを来和し雖しとして孫々以て獨立の旗揚ふ

北亞米利加の十三洲本國の政府ちを

武力を以て定とを頃八千七

百七十五年即ち我安永四年

名將わしんとん

英の本國しを軍勢と差向け威光を以てゐをを鎮めん

有ん共に紀元稅

しと告げんを

便ち民を備

天然の自由の樂を

盛をを我

とをもでも亜米利加人ハ固より必死

遺恨骨髄

お覚悟定め老若男女獨立の師と聞て

恨骨髄

悦びざる者なく町人ハ天秤棒を持て

所ハ天地の理法を

市を起を百姓ハ鉏鍬を携へて加よ

如水の年の秋十

を駆出もすしの勢

三河武士

扨出来ぬ千七百七十五年四月十八日

「きしんとんとい」

ふ霰の小戦ゆて始て血を流し五月ハ

「ぶんけう山」の戦

争ひをあきらめ一

國の騒乱とかり「わ

しんとん」を推して

惣大将と為し翌年

扨連判状世界へ示

を檄文ゆ英吉利王

の罪状責免自ら

建て合衆國武

器兵糧を之に比民

七月四日ハ八十八士獨立の檄文を布告して人氣益振ひ晝夜の戰爭或ハ克ち或ハ負け千辛万苦其有様ハ筆ハ盡し難し人の誠心天の恩惠遂ハ勝利を得て英吉利と和睦結び國政を定て

敵を海を越え新を引き

猛虎飛龍の勢を挽す如く

鉄石の如く堅

共和政府を建てわしんとんを大統領の職ハ仕て一大國の基を開き

國の光を生命

得て自由正理屈

て生涯を國に報

る北米一北決

して七年の長の月日

此度亞米利加ふて
帥の起せしハ誰一
人として頭取もな
く國中の人一般ふ
獨立を望む婦人ふ
児ふ至るまでも其
氣象を備へ居られ
とふれて英吉利よ
りさし向さる官軍
の勢ふても京都

政守知勇義の名
高き歳を流す血
乃河骨の山七十二戦
の艱難を嘗て忘
大偉利目出度き

しかれとも「ゴーベル」ふ戦争の起る以前
のことふを押ふて
とんといふ爲ふて
折しも冬の日町の
子供大勢ふて雪と
集め家と作を遊戯
としらへ「ゴーベル」
を居さし爲
へ官軍の歩兵来て

「英吉利」と和睦結
び新條約を来国
き政体尚て重君
為天ハ天下ハ
下ふて四年文代乃

何心なくあもと切げしみと度々かを
しうバ子供等大ふ
憤ふて英吉利の
将軍げいしの外出
もる所と待受け将
軍へ訴るあとのを
と呼捕けしか将軍
ゆざ笑ひ汝等も親
か謀反と教へられ

大統領上院ハ院の評
議役一國中ハ便不
便議り定免て法律
の威い行ち揺ふた
沙弟ニ進むまの富百

て笑へ来てしやと
いへバ子供等ハと
くれ氣色かく将
軍とみてつけ我
く共ハ人の指圖受
けて参てし者かは
らを今日将軍へ訴
ふるも余の義から
を我等常て官軍へ
對し失禮せし覚も

工製作高賣ハ美吉
利ハ肩を〳〵文教
技藝學校を佛蘭西
國ハ右に〳〵土地ハ
〳〵産物ハ五穀獣獣

ちらざるふ歩無の人を謂もなく我等の自から作りし雪達磨を踏崩し池の氷を破て人の樂を妨げしふ由を其乱暴を止むるども笑て答へず却て我等を謀反人なりと唱へ更ふ取合を差

綿畑を葡萄菜実

甘蔗金銀銅鉛鉄石

家凡世間の日用万

物一を不足なく

食を通ふ人に請求

圖役の人へ告もど

も矢張同様の挨拶

の三昨日も雪の家

と毀ちしふと既ふ

三度ふ及べて最早

其侭さし置き難く

思ふふ付此上ハ唯

大将軍の裁判と仰

ぐのみを恐も憚る

所もかく辯説明ら

先得易き活計就

中人口三千有餘萬新

北海農於て

かふ迷のべけもば「
ハ」もとの氣象ハ
憲心ー流石亞米利
かの自由の風ハ浴
ーたる小児等勇ま
しく心ハ以後不
時ハ歩兵ゆらば
必ず仕置を免ーと
ての挙動と繁し
遂ーとの詠めを

潮く到く國堺東
西一千二百里北南
七百里十三海
の年領人今ハ乃数三
十二年六州巻

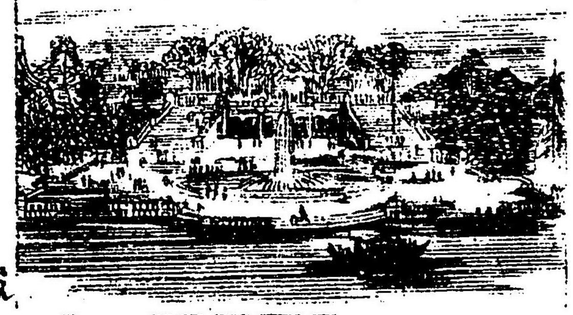
合衆國の東海岸ハ
八人世留久の外ハ

立ハ乃中心を和
新頻府四ー年
政事堂高さ二百八
十尺御門橋関巍
ことを結構ハ

「がふそさん」「ぶひら
ざるひやぢるちり
ふう」等數多の都會
文學技藝盛ん
して搭物製造商賣
繁昌の模樣ハ英吉
利佛蘭西ハ異から
ず南の諸州ハ一味
麥綿烟草等の産物
多し都て東北諸州

ハ商賣と勉め南方
ハ農業に勉とい
ふ

頓て北の方百里
ばかりを八百萬人
口一百萬中一
乃至四場を繁昌
ハ美吉利の領府



市中遊園の景

また紙佛たり西に
まして海岸の屋
保留仁屋八金の里が
永三年事始を先
て海を建てしたる

かぐやつふやの金山八間くも世界第一なる此外合衆國

の領分ハ金銀銅鉄の出る處甚ゞ多し何も蒸氣仕掛の道具を用て巧を盡し日本の金山とハ大ハ異なり

金山の穴の模様

人戸繁盛して
たゞの稼ぎ金山の
業ゆえに牧田
畑田の職業
忙しく太平

○女喜志古ハもと西班牙の領かなりしが千八百二十一年獨立して合衆政府と建てて千八百六十四年佛蘭西ハ攻滅されし佛の差図ハ「まきしこそや」といふ人をして國帝とぶせしが僅

海の岸にて

海を渡る

北の界

「女喜志古灣」

合衆國南東へ横さ

二年ハして慶應三卯年國中又乱をし新帝と殺しし

「中亜米利加」

界しを南北

九八百里東西三百

三十里八百三十方

地にて生産

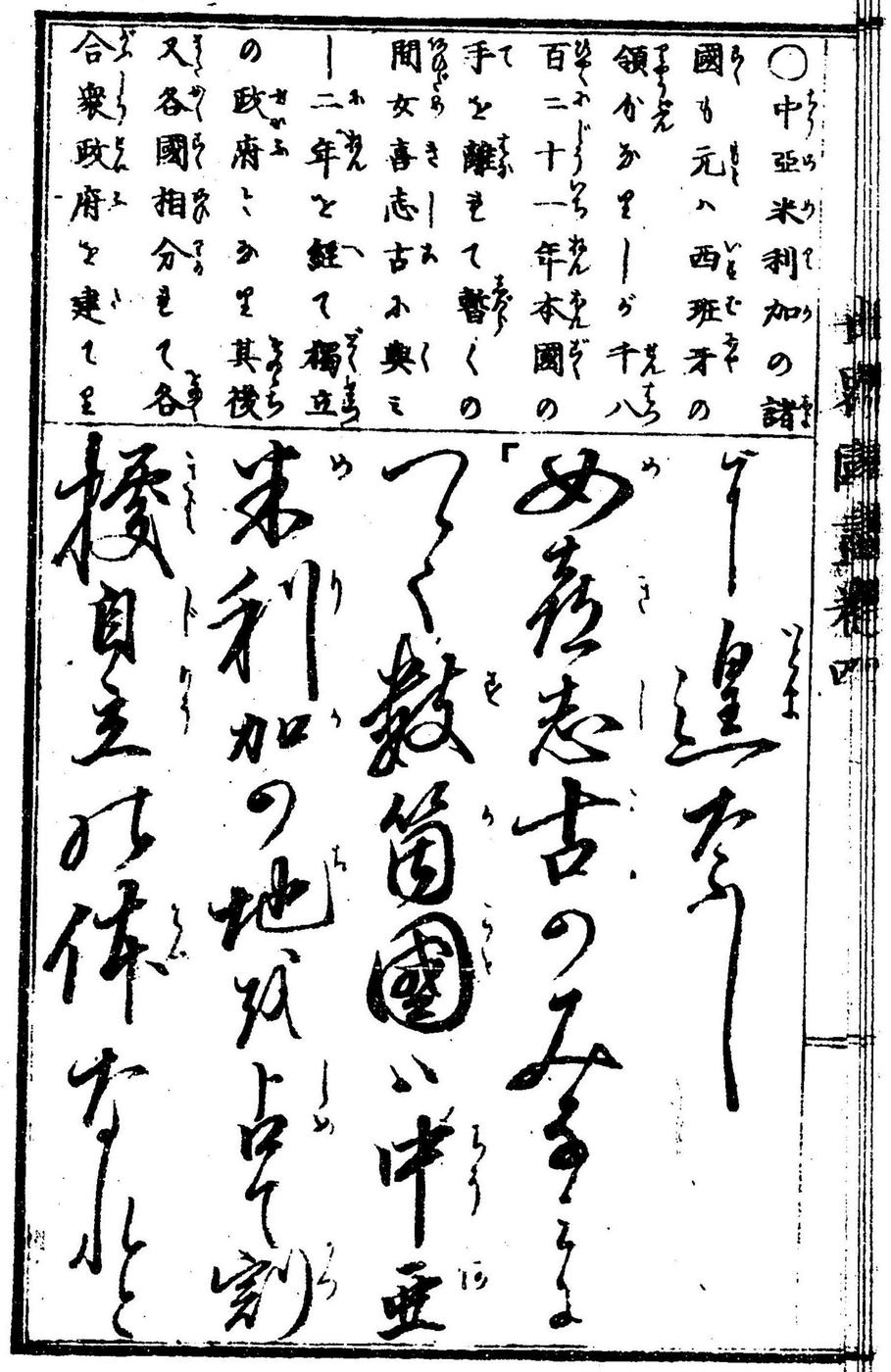
「光きーあ」を出す金類の中か最も多きハ銀あり東洋諸國へ其通用銀と積出し日本かて洋銀と唱ふるものえ矢張「めきーあ」のぞうら」「めきーあ」女喜志古の西海岸ふ赤保留古とくよ

物を衣食の用ゑ不足なく用ひあるる金銀世界中に稀なる富と利用の源ハ汲んん場き

き港ゆを飛脚船かどハ必ずらハ立寄ら

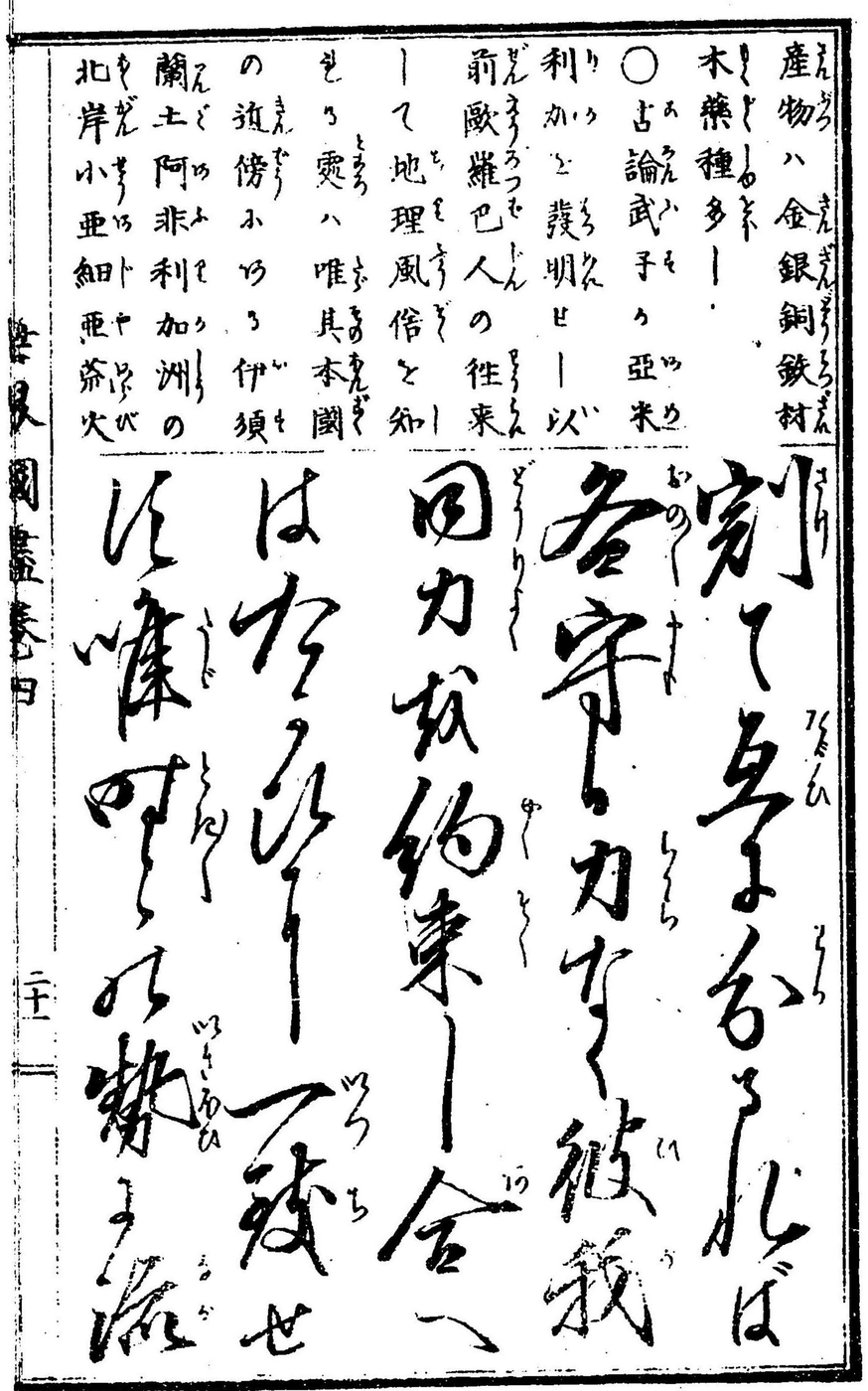
渊なる政府の基田ゑ民の信仰淺くを高もく政治を流ふ國の乱民乃罪代

○中亞米利加の諸國も元ハ西班牙の領かなりしが千八百二十一年本國の手を離れて暫くの間女喜志古ホ與ミ一二年を經て獨立の政府を其後又各國相分れて各合衆政府を建てを



産物ハ金銀銅鉄材木藥種多し

○古論武子ら亞米利加を發明せし以前歐羅巴人の往來して地理風俗を知るも處ハ唯其本國の道傍ふらら伊須蘭土阿非利加洲の北岸小亞細亞茶火



屋の海岸にて遠方ハ後印度のを即ち左の圖中ハ白き處其外ハ更ハ知らず唯此世界ハ圓きものとの理を信じて西の方ハも陸ばかりと思ひ紫ハ違らずとも見出しさるゆゑ故

北海に行末の治乱の程図中

西の方に亞米利加の東方ハ

解き嶋ハ西印度印度と所縁なき嶋を

ハ猿和土留の嶋と見ても印度の地續と思ひしにとなり

西の印度と名けし

ハ昔明應初年の頃

一方ハ老若男女濱邊ハ集を三艘の船ハ帆ハ様と見くらハ白き翼と廣げさる大化物なりと思ひし

世界の高き古論

武る西の世界ハ様

なりと見たり

「接いんど」

「接和出當」「亜米利加」
「だてんぱ」を見れば
「太平海」の行んとは
「白の」夢にも知れぬ海の路
「印」度の端と思ふ

西印度の嶋の數九
を一千ばを氣候冬
はひとしかれども
も其ハ熱し地味肥
て産物多し人口合
せて四百万人此内
六かの一ハ歐羅巴
の人種ホて其余ハ
黒人ゐを又黒白相
混じるもの拝

て人を告げて由来
を西印度の名
有の天豊明人ハ豊
嶋の名を共に伝

地ハもと西班牙の領かなりしが今ハ獨立國ふて皇帝ハ黒人なる邪麻伊嘉ハ英吉利領なる久場ハ西印度諸島の中ふて最も大ひなるその都と栗羽奈「邪麻伊嘉久」ふ西班牙あるを領を馬濱ハ

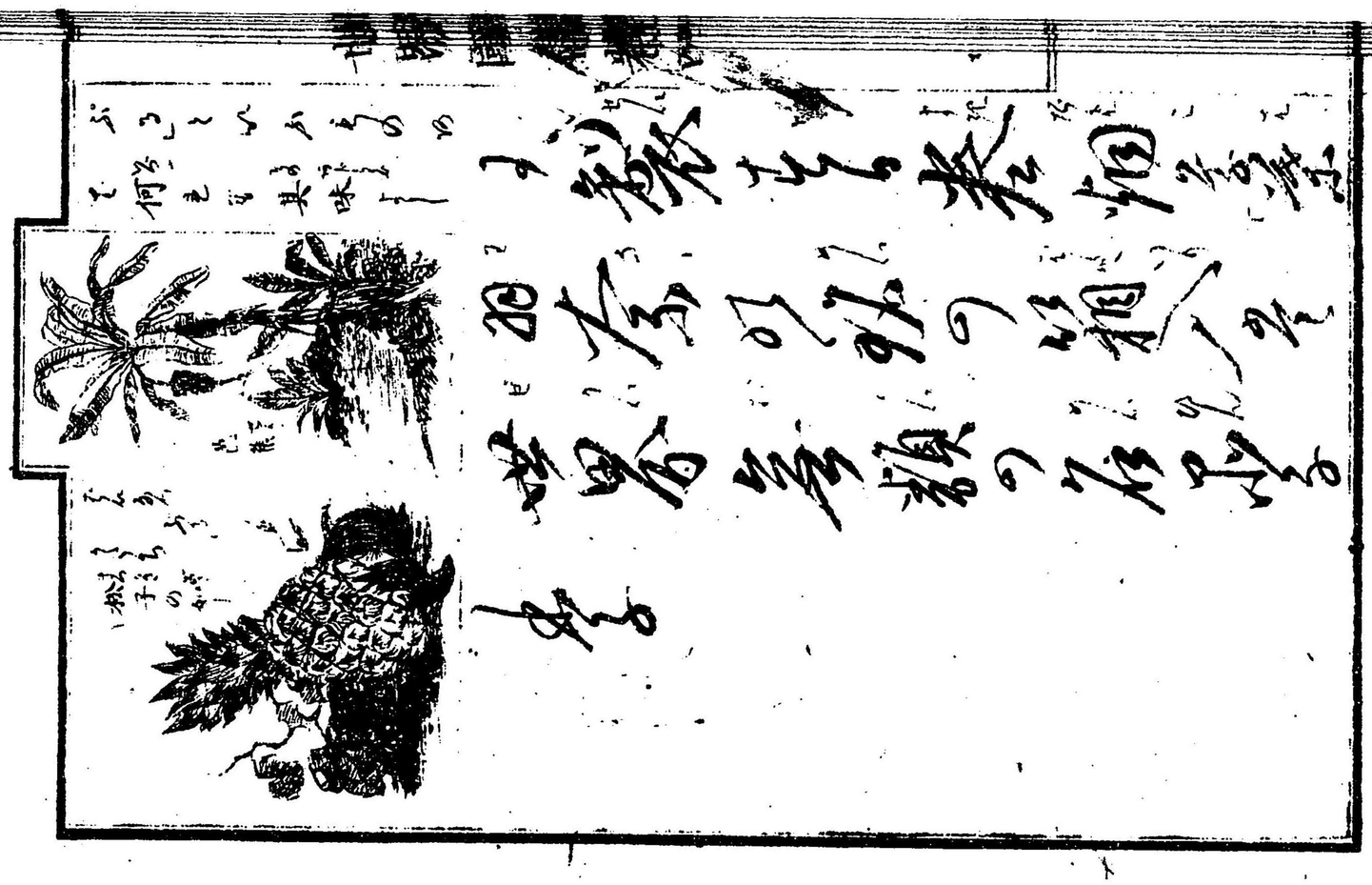
3千餘歲の嶋の數の多ク年世百ノ耳ニ慣ル名ヲ拝地「邪麻伊嘉久」場「馬濱」時候熱く

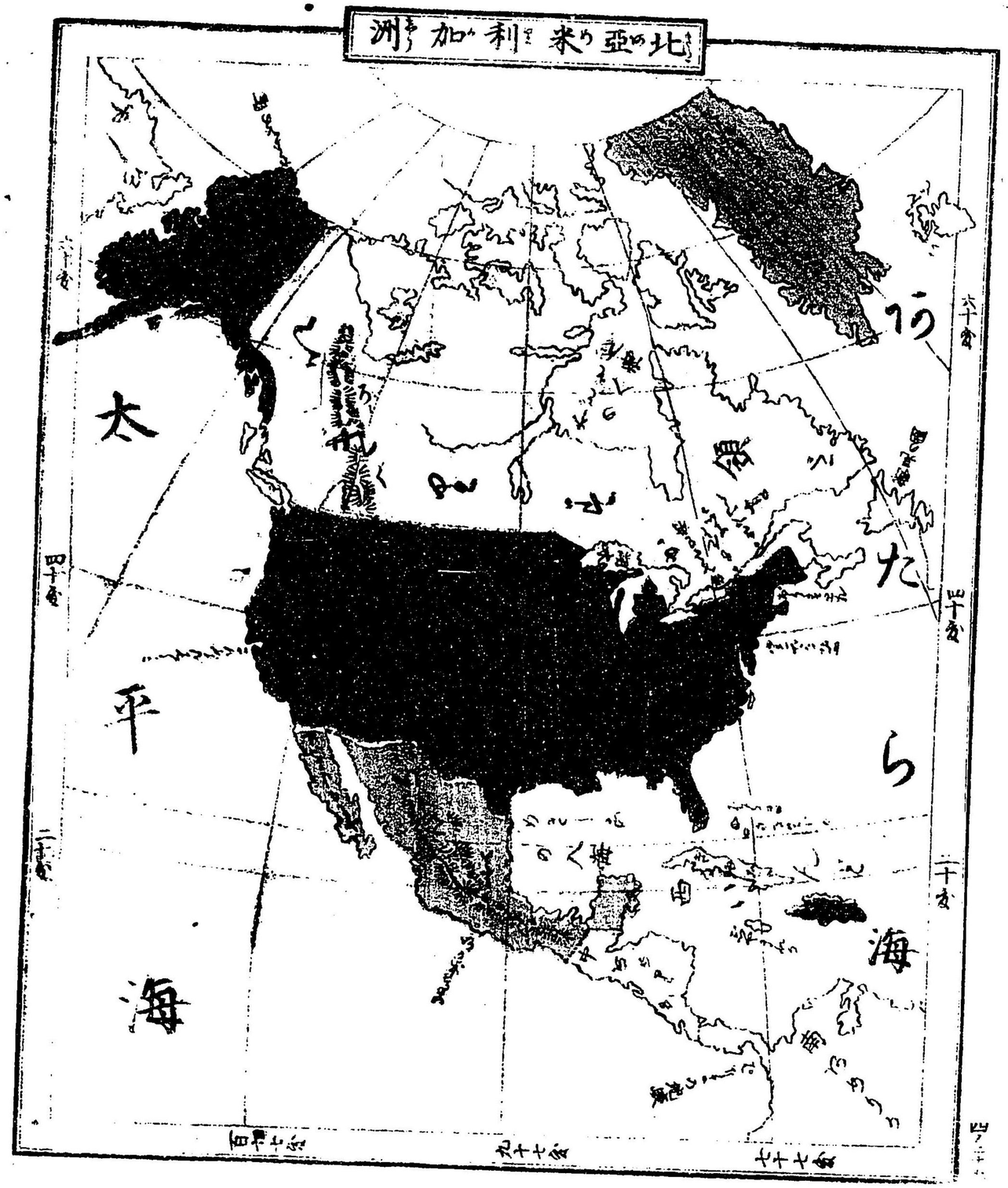
き嶋の一群ふて其數五百ゆを猿和七留も其一嶋

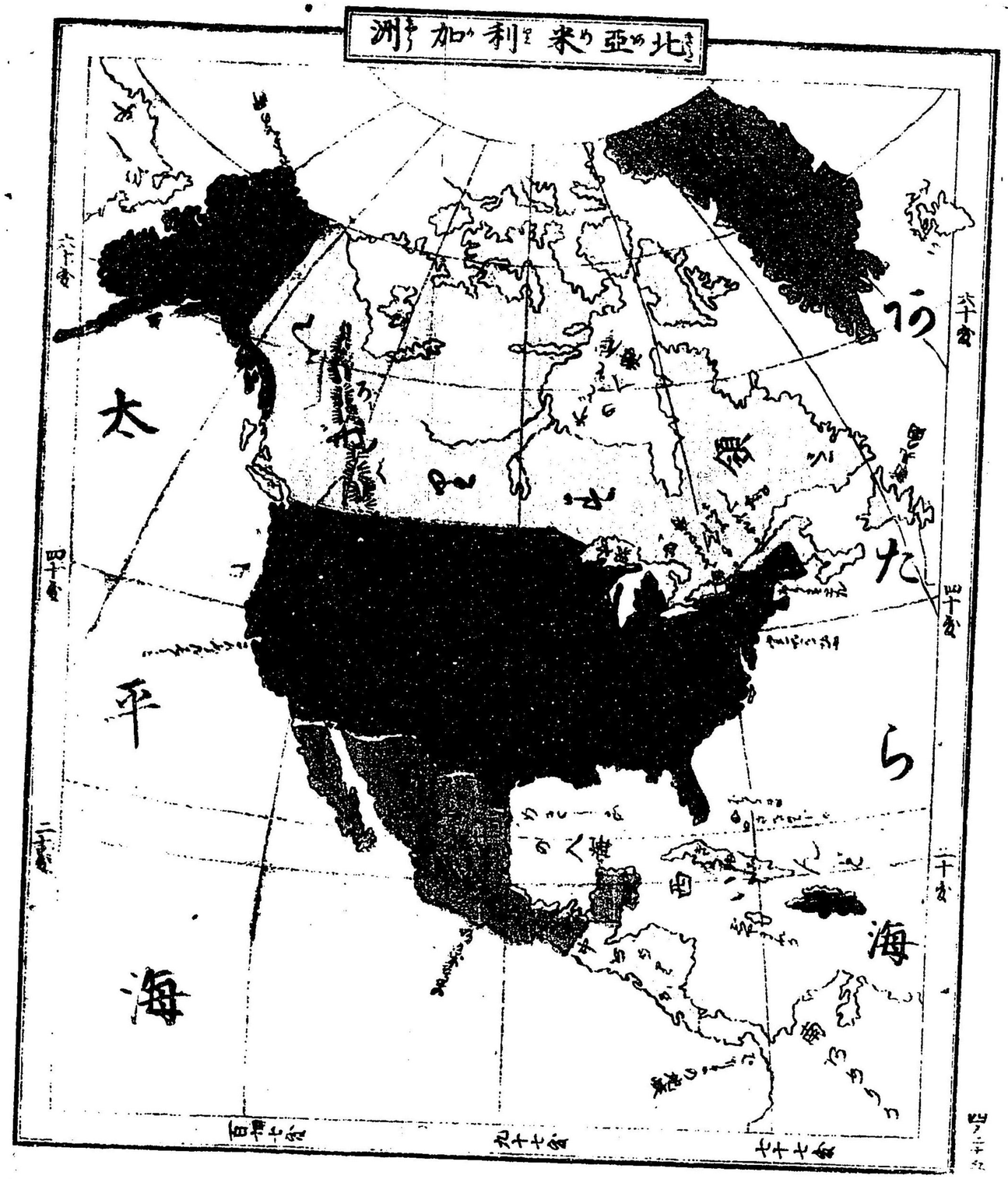
冬刻ハ土地の産物豊ふて衣食足ル

ものハ砂糖骨非綿烟草「拝地」ニ多

此邊の酒蕉ふハ實と結び又ハ芭蕉の実「久場」




北亞米利加洲
太
平
海
大
西
洋
海


北亞米利加洲
太
平
海
海
六十度
六十度
四十度
四十度
二十度
二十度